



来年夏に迫った東京五輪・パラリンピックで欠かせないのは、外国人への「おもてなし」だ。筑波大(茨城県)で行われている講義「おもてなし学」は、ボランティアなどをする際に役立つと、履修する学生が目立っている。日本や他国の文化やマナー、外国人への心配りも学んでいる。

■握手

「握手をしたまま、お互いに目を見て会話しましょう」。6月下旬、筑波大キャンパス。1年生約150人が2人1組になり、パーティーで外国人に出会った時の握手の仕方を学んでいた。握った手を上下に2、3回振り、相手から目を離さずに、英語で簡単な会話を交わす。



オリパラ教育
現場から

「おもてなし」の心 大学で学ぶ

指導にあたるのは、元日本航空客室乗務員の江上いずみ客員教授(58)だ。「あいさつにもう一言加えましょう」といったアドバイスが飛ぶ。東京大会のボランティアな

どこに役立つと受講した学生が3分の1を占める。大会ボランティアに申し込んだという玉井隼さん(19)は「色々な国の人と直接交流できる数少ない機会。何らかの

形でかかわりたいと思った」と語った。

■第一印象

筑波大で「おもてなし学」の講義が始まったのは2014年。前年に東京での五輪・パラリンピック開催が決まったこともあって、ボランティアのリーダー役を務められる若者の養成を目標に掲げた。日本の文化を学び、外国人の

たちに伝える力をつけることも重視しているという。講義は全10回で単位を取得できる。日本の冠婚葬祭のしきたりから、身だしなみ、あいさつの仕方、箸の正しい持ち方、テーブルマナーまで内容は幅広い。第一印象をよくするための「表情」や「態度」「言葉遣い」も学ぶ。

「就職活動に生かせる」と考える学生も多く、今年度は150人の定員に対し、受講希望者は600人を超えるほどの人気だった。

江上さんは五輪・パラリンピック教育(オリパラ教育)の一環として小中高校などでも年約150回、「おもてなし」について教えている。「外国人から見ると日本は『おもてなし大国』の印象がある。日本の文化や国際的なマナーを学び、ホスト国の国民として恥ずかしくない対応をしてほしい」と呼びかけた。



おもてなし学の講義で江上客員教授(右)から握手の仕方を学ぶ学生ら(6月下旬、筑波大で)

◆東京五輪・パラリンピックの主なボランティア

	活動場所	活動内容	人数	活動日数
大会ボランティア(大会組織委員会)	競技会場、選手村などの大会関係施設	競技運営のサポートや観客の案内など	8万人	10日以上が基本(1日8時間程度)
都市ボランティア(東京都)	空港、主要駅、観光地など	旅行者に対する観光・交通案内	3万人	5日以上(1日5時間程度)

*豆知識 大会ボランティア競技運営のサポートをしたり、会場内の案内をしたりする。東京五輪・パラリンピックの大会組織委員会が目標とした8万人の2倍以上にあたる20万4680人から応募があった。9月頃に研修に進む人が決まる。このほか、東京都などが募集し、観光や交通案内を担う都市ボランティアがある。